

## (九)新校舎落成のよろこび

だれもが待ち望んでいた新校舎は、仁王田圃の現在地に、昭和十三年にでき上がった。建築設計は、東京駅、両国技館、第一生命保険相互館、盛岡銀行（いまの岩手銀行）などの設計で有名な盛岡出身の工学博士、葛西万司の手になるものである。なお、校舎新築は、三田義正理事長在世からの懸案事項であったため、早くから設計図の検討が進められていた。牟岐・山中の両教諭が前理事長から校舎設計を命じられたこともあった。

それをもとにして話し合いが行なわれ、いくつかのポイントが葛西の本設計の中にもとり入れられたという。敷地は四千六十坪であるが、整地工事を千田組が請負い、昭和十二年一月七日に着手して同年二月十日に完了した。建物は延千三百八十坪で、建築工事を長沢組が請負い、昭和十二年八月十日に起工して、同十三年三月三十一日に竣工した。

この間、日華事変勃発による経済変動の影響を受けて建築用資材が高騰し、加えて労力確保がむずかしくなるという困難に出会ったが、工事関係者の非常な努力により、竣工をみたのであった。総建築費は、十万四千七百二十円十二銭である。

校舎は工字形の二階建てで、両側に講堂と雨天体操場を配し、棟数は八棟を数える。その中に普通教室十室、合同教室・図書室・理化学教室・博物教室があり、総室数は四十四室に達する。構造は木造瓦ぶきで、要所に鉄筋コンクリート造防火間

仕切を設け、ローリングシャッターの設備を施した。とくに注意が払われたのは、室内の通風・採光・照明、それに水道などの保健衛生諸設備であった。

なお、秩父宮殿下台臨の際ご休憩所となった一室は、旧校舎から分離して原形のまま新築校舎の中央に移転建築された。奉安殿と国旗掲揚台とともにコンクリート造のため、移転はたいへんな難事業であったが、全校職員生徒が進んで労力奉仕にあたり、一見不可能と思われたこの作業をなし遂げた。そして昭和十三年二月十二日、待ちかねたかのように引越しを実施し、翌十三日から新校舎で授業を開始したのであった。

落成式は、昭和十三年十月三十日を期して挙行された。折からの秋雨について招待客が続々と参集し、これに職員・生徒を合わせると一千名を越え、さしもの大講堂もせまく感じられるほどの盛況となった。

午前十時十五分、高橋首席教諭が開式を宣し、栄ある式典が開始された。壇上の校旗と卓上の松とが、ともに白壁に映えて荘嚴の気をみなぎらせている。一同、喜びの心で国歌を合唱し、佐々木校長が教育勅語を奉読した。続いて三田義一理事長が壇上に立ち、つぎの式辞を述べた。

### 式辞

本校新築功ヲ竣ヘ茲ニ本日ヲトシテ之ガ式典ヲ挙グルヲ得タルハ余ノ最モ欣栄トスル所也。

願ルニ本校ハ大正十五年ノ開校ニ係ル。当時県下教育界ノ実情ニ鑑ミルニ本校創設ノ要誠ニ



父兄にも喜ばれた岩中寮報

### 「岩中寮報」に見る寮生活

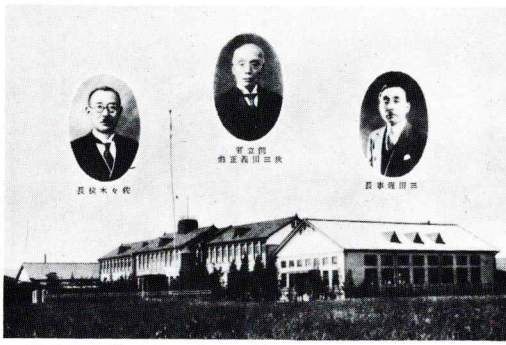
本校創立者三田義正翁の胸中には、当初、岩手中学校を全寮制の中学とする構想があったと伝えられる。ただし、それには膨大な費用がかかるため、結局実現するまでには至らなかった。

全寮制こそ実現はしなかったものの、寮の存在意義を重視する方針は生き続けた。寮の名称を、校訓にちなんで「積慶寮」「重暉寮」「養正寮」としたことに、それが現れている。「校風の作典は寮舎から」といわれた時期もある。

昭和十二年五月二十日に「岩中寮報」第一号が出された。B5判四ページもので年四回発行をたてまえとし、編集人は牟岐喆雄、発行人が山中順三となっている。当時の寮生は五十余名に達し、満員の盛況であった。佐々木校長は、「遠く離れたる父兄の方々にその愛する子弟の日常生活を親しく報道するの機関たらしめんとする寮監の計画は、尤も時宜に適



校舎落成を報じる岩手日報



落成記念絵葉書の中の1枚

岩中竣工祝辭  
今、岩中が完成して、上は天に響き下は地に響く。...

祝意を寄せた岩手日報社説

急務ナルモノアリ、是ヲ以テ校舎ヲ新築スルニ  
違アラズ草創ノ際姑ク旧盛岡高等女学校跡ヲ以  
テ之ニ充用セリ、然ルニ其校地校舎ノ狭隘等相  
俟ツテ一校ノ志氣ニ影響スル所ナキ能ハズ其ノ  
成績亦従ツテ予期ノ如クナラザル憾アリ。前理  
事長三田義正深ク之ヲ慨シ昭和十年之ガ移転新  
築ヲ企テシガ偶々病ヲ獲テ起タズ、一時既定ノ  
計画ヲ延期スルノ已ムナキニ至レリ。昨春故人  
ノ喪終ルヤ乃チ其ノ遺志ヲ繼承シテ工ヲ進メ本  
年三月ニ及ビ事完ク成ル末ダ必ズシモ結構ノ壮  
輪奐ノ美ヲ以テ称スベカラズト雖周圍閑闊、構  
造堅牢、多数子弟ノ学場トシテ略欠漏ナキニ庶  
幾カラン乎。然レドモ教育ノ要ハ畢竟心ニアリ  
テ形ニ存セズ、今ヤ本校ノ新築成リ而カモ校風  
振ハズ成績挙ラズ自ラ雌伏甘ズルガ如キコト  
アラバ是雷ニ前理事長ノ遺志ニ非ザルノミナラ  
ズ、亦実ニ教育ノ本義ニ悖戻スルモノト謂フベ  
キ也。希クハ教職員諸君竝ニ生徒諸子協心戮力  
以テ本校創立ノ主旨ヲ達成センコトヲ。聊カ所  
感ヲ述ベテ式辞ト為ス。

昭和十三年十月三十日

財団法人岩手奨学会

理事長 三田 義 一

このあと、監事の白井定民から工事報告があり、  
ついで雪沢千代治岩手県知事が告辞を朗読した。

「(前略)

先覚三田義正氏夙ニ献身奉公ノ令聞高ク特ニ  
育英ニ志ス処アリ、深ク本県中等教育ノ実情ヲ

せるものとして、予の内に賛意を表する  
所である」と、発刊祝辞を寄せた。

「岩中寮報」の紙面には、寮をいわゆる  
下宿代用とはみなさず、教育道場であ  
り人生道場であるとする気迫が随所にみ  
なぎっている。たとえばある号には、寮  
生成績一覧表が掲載された。平均点は何  
とより、前学期席次、今学期席次が明記  
され、○印で追越し人数、△印で追越さ  
れ人数が分かるようにしてある。またあ  
る号をみると、二高合格の三田循司君以  
来久しく寮からの上級校進出者をみなか  
つたが、今回金沢修一君が見事陸軍士官  
学校に合格し、学校のためにも寮のため  
にも、万丈の気をはいてくれた。非常時  
にふさわしい合格者を出しうれいとな  
る。さらに、一年生のいさかいが絶えな  
くて困るといった動静報告も、こまごま  
とのつている。

この「岩中寮報」は、第七号まで続い  
たが、物資事情が悪化して、その後の発  
行はと絶えた。

十回生の石川進太郎は、寮生活の思い  
出をつぎのように語っている。

「駅前旅館の息子でありながら寮に入  
ったので、私が市内在住者寮生第一号だ  
と思います。寮ではいいことも悪いこと  
も覚えましたが、楽しいものでした。応  
援歌練習や説教のときなどは、上級生が  
かばってくれました。物資不足になり出  
したところで、干しタラばかり三カ月ほど  
食べさせられたこともありました。」

洞察シテ匡救ノ念ニ燃ヘ遂ニ自ラ巨万ノ資ヲ投  
 ジ大正十五年四月岩手中学校ヲ創設シ、先ヅ県  
 立盛岡高等女学校ノ旧校舍ヲ以テ仮用セシガ爾  
 来十有余年校運年ト共ニ隆昌ニ施設益々完備ヲ  
 要スルヲ以テ到底従来ノ校地校舍ニ満足スルヲ  
 得ズ爰ニ校舎移転ヲ企図シ、市井ノ雜踏ヲ避ケ  
 遙ニ秀峯岩手ヲ仰グ適地ヲ選ビ現代式ノ設計ヲ  
 以テ理想的ナル教育ノ殿堂ヲ営ムニ至ル洵ニ之  
 レ聖代ノ慶事ニシテ洋々タル本校ノ前途豈慶祝  
 セザルヲ得ンヤ。

(後略)

さらに来賓祝辞として、上村勝爾盛岡高等農林  
 学校長、大矢馬太郎盛岡市長、武智啓次郎盛岡中  
 学校長、三田地勘治郎城南小学校長、中村謙蔵岩  
 手中学校後援会長らが祝賀と激励の言葉を寄せ、  
 職員、生徒に多大の感銘を与えた。

続いて、松見得明同窓生総代が、祝辞を述べに  
 立った。

「本日母校岩手中学校校舎新築落成式ノ式典ヲ  
 挙行セラルルニ当リ衷心歎喜ノ念ニ不堪、茲ニ  
 同窓生一同ヲ代表シテ一言祝詞ヲ述ブ。顧レバ  
 我が岩手中学校が大沢川原ニ呱呱ノ声ヲ上ゲシ  
 ヨリ茲二十有三年、其ノ間学習ニ体育ニ少カラ  
 ザル不便ヲ感ゼシハ自他共ニ之ヲ認メ遺憾トナ  
 セル所ニシテ、ソノ新築ヲ要望スル切ナルモノ  
 アリキ、然ルニ此度旧来ノ面貌ヲ一新シ堂々タ  
 ル新校舎ノ落成ヲ見、生徒ノ学習ニ利便ヲ加ヘ  
 シコトハ我レ人共ニ欣快ニ不堪所ナリ。

惟フニ現下我国ハ益々多事多端ナル折柄ヨク  
 万難ヲ排シテ外觀内容共ニ充実セル新校舎ノ竣

功ヲ見ルニ到リシハ独リ本校ノ喜ビニ止マラス  
 廣ク教育界ニ取りテノ欣快事ナリト信ズ。

(後略)

引き続き、白井教諭が祝電を披露したのち、  
 佐々木哲郎校長が謝辞に立った。

(前略)

現理事長三田義一氏ニハ御先考ノ御遺志ヲソ  
 ノ俣ニ受ケ継ガレ、岩手奨学会役員各位ノ熱誠



秩父宮台臨記念碑



右の裏面



城山山頂の駐蹕之趾碑



昭和16年に講演のため来校した米内光政海軍大将(中央)、右端が三田理事長、左  
 端は佐々木校長

ナル御協力ノ下ニ万難ヲ排シテ一意専心新築ノ  
 事ニ努力セラレ幸ヒ本日ヲ以テソノ落成ノ式典  
 ヲ挙行スルノ運びトナツタノデ御座イマス。  
 新装全ク整ヒマシタ本校校舎ハ御覧ノ如ク環  
 境善美、建築ノ様式マタ規格ニ則リ、通風、採  
 光ニモ意ヲ用キ、堅牢ニシテ大凡ソ理想的デア  
 ルト申シテモ敢テ過言デハ無カラウト存ジマス。  
 コノ新シイ学ビ舎ニ於キマシテ岩手ノ靈峰ヲ朝

ナタニニ仰ギツツ学業ニイソシミ、心身ノ鍛練  
ニ努ムル生徒達ノ幸福ハ言フ俟タザル所デアリ  
マス。

(後略)

最後に、生徒総代増田杜男が謝辞を述べた。その要旨は、大沢川原の旧校舎での生活がなつかしく思えるのは、教育が形よりも実を重んじるものだからだと考えること、しかし、新校舎に移って新しい希望と歓喜に満ちた生活が送れるのは、やはりうれしいことなど、生徒らしい率直な喜びを表明した。

式を終えたのち、学校長が先導して校舎内を案内し、来賓に秩父宮殿下御成記念室、生徒成績品展覧室、特別教室その他の諸設備を見ていただいた。正午からは、第一会場の剣道場と第二会場の柔道場に分かれて、祝賀会が催された。鈴木莊六大将筆の「積慶」「重暉」「養正」の校訓額を仰ぎ、色とりどりの万国旗を目にして、祝賀気分があたりにただよった。理事長が挨拶し、来賓を代表して知事が謝辞を述べた。レコード音楽がにぎやかに流れ、宴がたけなわになったころ、盛岡市長の発声で「岩手中学校万歳」をとねえ乾杯、盛会のうち一時過ぎ散会した。第二会場のほうでは、卒業生がさらに校歌を合唱し、母校の発展を祝って解散した。

新校舎の落成は、本校の発展期を象徴する大きなできごとであった。

## (十二)の記念碑

### 秩父宮殿下台臨記念碑

昭和十年十一月、秩

父宮殿下が本校の学校教練を視察するため、大沢川原の旧校舎にお見えになったことは、当時としてはたいへんなできごとであった。昭和十三年に現校舎が完成した際にも、殿下のご休憩所にあてられた一室を、そのまま新校舎の一部として移築したほどであった。

この台臨の栄誉を永久に伝え残す目的で、早くから記念碑の建立が計画されていた。すなわち、台臨の二十日後に開かれた職員会議で、すでに計画の決定をみている。それによれば、五カ月間に職員は一人一円二十銭ずつ、また生徒(六回生から十回生まで)は一人六十銭ずつを献金し、その合計金額二百五十円余りを基金として、石碑を建立することになった。

その後、三田義正翁の逝去という試練を乗り越え、三田義一理事長は新校舎建設の大事業に着手したが、それと同時に、台臨記念碑を新しい敷地内に建設する準備も進められた。新校舎落成式の段取を相談する委員会の席上、「台臨記念碑も完了するよう取り計らう」ことが協議されている。

記念碑の碑石は岩手山麓の葛根田川流域から、また台石は多々羅山から、それぞれ発見したものをを用いることになった。その運搬に当っては、いづれも職員・生徒が労力奉仕をした。また、碑文は「鴻恩無窮」の四文字とし、理事長と懇意な郷土出身の偉人、米内光政海軍大将に揮毫を依頼し

### 六尺ヤンスン

柔道部が昭和十六年十月、第十二回明治神宮大会岩手県予選で始めて優勝したとき、新校舎講堂の壇上から誇らしげに戦果を報告した大男のマネージャーがいた。山瀬康一という本名は聞いたことがなくても、「六尺ヤンスン」というあだ名は全校生が知っている岩中の名物男であった。身長が六尺四寸をわずかに切るころからついたあだ名であった。何度か原級を重ね、おのずからなる風格を備えていた。

この「ヤンスン」大人には、数々の逸話が残っている。ライオン先生の猛烈な説教も全然ききめがなかったとか、正語会でいきなり歌を歌ったとか、上級生の修学旅行に無料・無断で参加したとかいってたぐいのものである。修学旅行の件については、上級生といっても、かつての同級生ないしは下級生なのだから、いっしょに同行したかった気持は理解できる。何でもそのときの「ヤンスン」の費用は、ロッパ先生が払ったという。とにかく、成績などはまったく気にしない傑物で、生徒の間では絶大な信望と人気を集めていた。いまでもこの愛すべき人物の思い出を大切にしている人が多い。

た。

こうして、新校舎落成式の約二カ月後、昭和十三年十二月二十三日、台臨記念碑の除幕式が挙行された。式には三田理事長をはじめ、上村・小泉・小野寺・遠藤・吉田・淵沢・鈴木の各財団理事・評議員のほか、新岩手日報社社長後藤清郎や、工事関係者などの来賓が参列し、佐々木校長の式辞と島軒教諭の工事経過報告に耳を傾けた。職員も生徒も、感激を新たにしたり一日であった。これが現在、校門と石桜図書館の間に立っている「鴻恩無窮」の碑の、誕生の由来である。

天皇陛下駐蹕記念碑 秩父宮殿下の台臨よりも七年前の昭和三年十月、陸軍特別大演習のとき、天皇陛下は紫波郡古館村の城山にお立ち寄りになった。これを末長く記念するために、行幸の直後に、城山の地が、所有者の三田義一から本校に寄贈された。以後、城山行軍は、本校伝統行事の一つとなった。

この城山には、当初「統監 陛下駐蹕之地」の文字を記したヒノキの標柱が建てられたが、その後歳月を経るにしたがって古くなり、再建の必要が生じていた。

たまたま昭和十五年は、当時のわが国の暦法による紀元二千六百年に当っており、全国で各種の記念行事が行なわれた年であった。その九月に、三田理事長と佐々木校長が相談して、城山山頂に記念碑を建設することを決めた。石材は石巻から求め、碑文「駐蹕之趾」は、秩父宮殿下台臨記念碑同様、米内光政海軍大将が揮毫した。

建立作業は、生徒の勤労奉仕で進められた。一年生と二年生が基礎工事の地固めにあたり、三、四、五年生が山頂まで碑石を運搬する難作業を受け持った。十一月二十九日の運搬当日、日詰駅から作業が始まった。荷馬車を二両連ねた上に、長さ三間幅四尺厚さ八寸の巨石をのせ、前に二本の長いワイヤーロープをつけて、三百人の職員・生徒が力を合わせて引つ張った。

現地で記念碑の除幕式が行なわれたのは、昭和十五年十二月十五日であった。式に引続いて祝賀会が催され、全員に紅白の餅が配られるとともに、勤労奉仕に対する慰労の意味もあつて、熱い豚汁が馳走された。当日の出席者は、三田理事長はじめ、財団関係者、理事長母堂、後藤新岩手日報社長、藤村視学、猪原古館村長など来賓八十数名、それに本校職員・生徒四百五十で、好天に恵まれ盛会であつた。

## (七) 戦時体制の中で

昭和十二年に始まった日中戦争は拡大の一途をたどった。昭和十三年には国家総動員法が発動し、戦時体制は一層強化された。政党や労働組合も解散され、大政翼賛会が結成された。貯蓄、献金、贅沢廃止運動なども起こり、国民生活は戦争一本にまとめられて行く。十四年には日米通商条約廃棄が通告され、欧州における第二次大戦の勃発はさらに重大な影響を及ぼした。十五年には日独伊三国同盟を結び、十六年には仏印進駐があつた。こうした内外の激しい動きに応じて国民の総力結

## ラグビー部部歌

作詞 山中順三

日々三綱を銘記して  
鍛えたり精神と技能  
石桜の強きラグビーには  
必勝の誓い堅し  
いざ征けいざ征けよ  
堂々の技能示し  
猛き精神一にして  
ツララ ブラックイエロー  
ツララ ツララ  
ツララ 岩中岩中ツララ

昭和十六年秋の作である。盛中に大勝して帰校する途中、山中部長が作詞し、学校内での祝勝会で発表、合唱したという。曲は、慶応ラグビー部部歌から借用したものである。

十三回生の武田武美は語る。

「祝勝会は階段教室でやったと思います。歌を歌ったことがないという山中先生が、やや小さい声で一節一節歌い、そのあとから部員もついて歌いました。あのころは、部員もラグビーの知識がなかったのです。山中部長はルールブックを破いて回覧させ、数時間のルール研究会をもつたりしました。戦術や記録法など本から吸収したわけです。先生は、それまでとは違う新しい観点からラグビー部を指導されたようでした。かわいがられまた厳しくしつけられました。あの部歌は青春の思い出につながります。」

集が叫ばれ、学校も学生、生徒もこの大きな流れの中に組み込まれていった。

さて本校はこの流れにどのように対処したであろうか。

### 報国団

昭和十六年六月、石桜報国団が結成され、従来の石桜会は発展的に解消した。学校長を団長とし、総務部、鍛錬部、国防訓練部、文化部、生活部の五部を配した。部は数班から成り、班はいくつかの組から成っていた。一例を挙げれば、鍛錬部は練成班、奉仕班、武道班、体育運動班の四班から成り、武道班には剣道組、柔道組、弓道組が属し、体育運動班は体操組、競技組、冬季競技組、蹴球組、庭球組、籠排球組、相撲組から成っていた。国防訓練部は錬武班、滑空班、防護班から成り、錬武班の中には国防競技組、射撃組、銃剣術組、軍楽組等があった。伝統のラグビー、アイスホッケーもそれぞれ蹴球組、冬季競技組と名称が変り、文化部の雄正語部も改称の例外ではなかった。十六年度団報には次のように記されている。

「昭和十六年我が石桜会正語部は、新に岩手中学校報国団文化部弁論組として再誕した。

近年漸く隆盛に赴き来りし正語部は此処に従来の自由主義的個人主義的なる組織を蟬脱したる非常時下の報国隊の一組としての第一歩を踏み出した。即ち昭和十六年度校内秋季弁論大会は、新体制下第一回の大会である。」

その第一回弁論大会の参加者及び大会の次第はつぎのとおりであった。当時の生徒の心情を知るし

るべとして記す。

開会の辞 幹事 西條 共安  
校長訓話

一、ラグビー礼讃 四乙 川辺 栄吉  
二、我等の務 四乙 大木 士治

三、青年の滑空 四乙 下村 幸男  
四、岩手の山に對す 三甲 村上登志男

五、中学生活に入りて 一甲 花館 英世  
六、我國の武士道 四乙 岡本 邦光

七、時局に処する覚悟 五甲 川越 宏  
八、必勝の信念 二甲 中村 一雄

九、我等の覚悟 五甲 大志田 武  
十、感激の力 四甲 佐藤喜兵衛

十一、自ら補へ 四乙 北口 博  
十二、日本民族の使命 三乙 熊谷 敬

十三、知られざる勇者 五甲 川村 陽一  
十四、人間と自然 二乙 村田 博見

十五、自己を視つめる力 四乙 松本 友敦  
十六、南海の曙 五甲 加藤 養助

十七、本務に邁進せよ 四乙 東 陸奥  
十八、農人と郷を愛すの心 四甲 武蔵 巍

講評 小林 先生  
賞状授与（審査報告）

校歌合唱  
閉会の辞 幹事 大西 博

報国隊 十六年十月二十七日には岩手中学校  
報国隊が編成された。

岩手中学校報国隊編成規定  
一、学校報国団ノ内ニ指揮系統ノ確立セル全校

編隊ノ組織ヲ編成シ国家的要請ニ基ク各種ノ要務ニ服シ且ツハ学校教練、食料増産作業等実施ニ当リソノ実効アラシムルヲ以テ隊組織編成ノ目的トナス

一、本隊ハ岩手中学校報国隊ト称ス  
一、本隊ハ学校長ヲ中心トシ教職員及生徒全員ヲ以テ編成ス

一、隊本部ハ教職員ノ一部配属將校ヲ以テ組織シ若干ノ生徒ヲ直屬セシム

一、隊本部ハ臨機非常召集ヲナシ得ル如ク左記事項ニ付キ計画立案シ置クモノトス

一、職員召集計画  
二、生徒召集計画

三、非常災害対策処置計画  
一、報国隊ノ組織左ノ如シ

一、本部 救護隊並ニ喇叭隊ヲ直屬セシム

二、本隊 五箇中隊、各二箇小隊各五箇分隊編成トス

三、特別警 一箇中隊編成、防空補助隊 備隊 ヲ兼ス

一、報国隊ノ服務ニ関スル細則ハ別ニ之ヲ定ム

十六年度の編成組織表には、報国隊長は学校長佐々木哲郎、大隊長牟岐喆雄、第一中隊長山中順三、第二中隊長高橋与平、第三中隊長今野鉄郎、第四中隊長小林博、第五中隊長神谷昌一などである。一年甲組が第一小隊、一年乙組が第二小隊、この一年生が第一中隊を構成した。

このころ、服装は戦闘帽に巻脚絆がけであり、

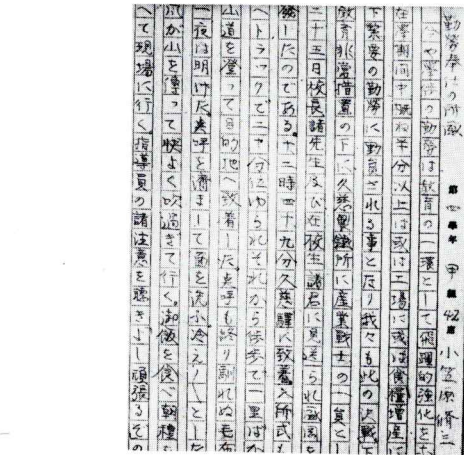
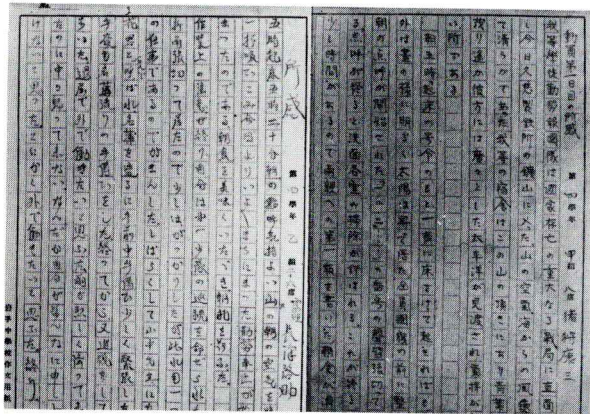


勤労働員に行った生徒の作文綴(16回生)

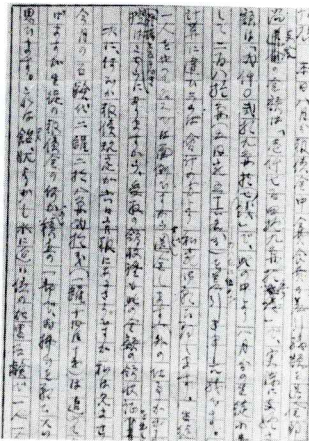
十六年四月からは胸札の使用も始まった。登校時には集団で隊伍を整え、教師に会えば挙手の礼、奉安殿には最敬礼であった。職員室の出入りにも、「何組何某々先生に用事があって参りました」と大声で叫ぶのである。特別警備隊が編成されたのもこのころで、防空防火演習なども実施された。戦勝祈願行事も多くなり、これへの参列も欠かすなかつた。校内映画会は月に一、二回あり、「戦記物」が上映された。

予科練、少年兵などへの志願者もふえてきた。このころ、卒業生の戦死者も数を増した。教材室が忠霊室に早変わりし、黒梓の写真がかざられた。中に学生服姿の写真が一枚あった。アツツ島で玉砕の三田循司であった。

こうして学園は戦時色一色となったのであるが、それでも十七、八年ごろまではまだよかつたとい



勤労働員生活をしるのばせる所感の数々



勤労働員生活の詳細を報告する小林教諭の校長・教頭あて書簡

える。全校生が同じ屋根の下に暮らせたのである。回数こそ減つたが、ラグビーも柔道剣道も水泳も対外試合が持てたのであった。(学徒体育大会禁止通達は十八年九月二十四日)

**勤労働員** 昭和十三年には後藤野飛行場建設作業、十五年には滝沢での製炭作業などの勤労働員があつたが、このころから、勤労働員はいよいよ錬成的意味合いを越えるものになつて行つた。

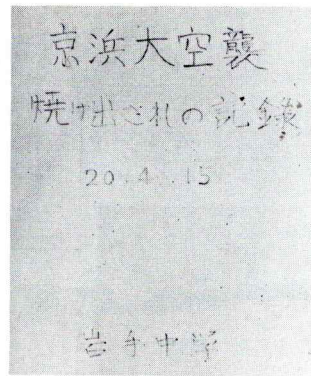
そして十六年二月には「青少年学徒食糧飼料等増産運動実施要項」が発表され、勤労働員は国策協力の実践的教育として位置づけられた。近郊農村の田植え、稲刈り、暗渠排水工事などへ出動が多くなつた。十九年三月には「決戦非常措置要綱ニ基ク学徒勤労働員実施要綱」が閣議決定され、中等学校以上の学徒は原則として通年勤労働員される

ことになつた。その結果、この年から三年生以上の高学年は事実上授業は完全停止状態となつた。十九年六月二十五日、四年生九十二名が久慈鉦山に出動した。鉦脈の表土をはぎ取り、その土をトロッコで運んで捨てるのが仕事であつた。同年七月十七日には、五年生六十三名が日本鑄造鶴見工場へと出発した。屑鉄を溶かして鑄型に注入するのが仕事である。同年十月には三年生が久慈鉦山に出動し四年生と代つた。四年生は三菱重工川崎工場へ出発した。十二月には久慈鉦山の三年生は日本製鋼横浜製作所へ配置変えになつた。

下級生の二年生は六月には庄ヶ畑、向中野、山岸方面に出動して田植作業、九月には不動村に行つて稲刈り作業をした、農家に分宿しての援農であつた。

二十年三月二十七日、五年生七十一名と、繰上

卒業の四年生九十八名は川崎市内の三菱重工工場  
で卒業式を挙げた。しかし中等学校新規卒業者の  
勤労働員継続に関する閣議決定があり、動員は継  
続された。大学合格者も理科系以外は現状継続で  
あった。



岩手中学 佐々木睦武  
台内に食堂の裏の防空壕に退避  
し、壕から出て空に入り消火の準備  
した。下の所で消火に勤めて居り  
ました。行く階段の横の廊下に居り  
ました。弾が落ちたとき、二班  
の居る中に先生が居た。退  
り行李一箱を持って裏の隅の方に  
立ち出た。行李一箱 中は本衣  
類は少く、リュック(衣類)教科

昭和二十年四月十四日  
先生の特許の号の所に食堂の側  
に防空壕に退避し、壕から出て  
空に入り消火の準備をした。下の  
所で消火に勤めて居りました。行  
く階段の横の廊下に居りました。  
弾が落ちたとき、二班の居る中  
に先生が居た。退り行李一箱を  
持って裏の隅の方に立ち出た。行  
き先は不明である。先生は退り  
行李一箱を持って裏の隅の方に  
立ち出た。行き先は不明である。  
先生は退り行李一箱を持って裏  
の隅の方に立ち出た。行き先は  
不明である。先生は退り行李一  
箱を持って裏の隅の方に立ち出  
た。行き先は不明である。先生  
は退り行李一箱を持って裏の隅  
の方に立ち出た。行き先は不明  
である。先生は退り行李一箱を  
持って裏の隅の方に立ち出た。

焼け出されの記録——山中教諭が保存していた16回生の記録が戦後卒業生に戻され、有志の手によって複写・配布された

二十年四月十五日、川崎が空襲され、十六回生の宿舎は焼失した。教科書も卒業証書も灰となった。

二十年八月、終戦時の本校生は、四年生が日本製鋼横浜製作所、三年生は久慈鉱山、東北繊維工場、盛岡専売局に分散配置、二年生は和賀郡湯田村の開墾作業、一年生は岩山での開墾作業であった。校舎は人気もなく、校庭には某会社の疎開機が数台置かれていた。

小林教諭の手紙 当時の勤労働員のもようを知るよすがに、生徒を引率して日本鑄造鶴見工場へ行っていた小林博教諭が、昭和十九年九月九日付で佐々木校長・牟岐教頭にあてた手紙を、ここに収録しておく。

拝啓 本日八月份報償金中舎費食費の差引残額を送金致します。尚支給の金額は「壹仟七百四拾九円拾参銭」で実際に支給された額は「貳仟〇貳拾九円拾七銭」で此の中より八月份の生徒小遣として二百六拾円(五円宛五十六名分)を差引きました残です。計算に違いがあらば會計の方より私宛お願い致します。生徒一人一人をやっているのは面倒ですからすぐ送金します(外の仕事が出来ません)証拠となるべき控えはこちらにありますから、受取の領収証も此の金額の領収証を出しましたから。

次に何だか報償規定が六日官報にあるようですが私は見ません。今月の石鹼代二罐二拾八円貳拾銭(一罐十四円十銭)は追って申上げます



三田循司

昭和十八年の石桜報国団・図書班報の末尾に、つぎの文が見える。

図書室創設当時その発展に尽力せられた先輩「三田循司氏」は五月二十九日北辺の小島アツツに於て玉碎、護国の鬼となりたまふ。  
謹んでここに哀悼の意を表す。

(「石桜」四十二号)

本校から二高、東大と進んだ三田循司は、詩を通じて太宰治と親しくなった。三田の死後、太宰は三田を主人公にした短編「散華」を書き、昭和十九年三月号の「新若人」に発表している。「散華」によると、太宰は最初、三田の詩をあまり高く評価していなかったらしい。しかし、大学を卒業してすぐに出征した三田は、太宰に何通かの便りを送った。その最後の一通に、太宰は心の底から感動した。アツツ島からのその葉書には、つぎの文章が書かれていた。

御元氣ですか。  
遠い空から御伺ひします。  
無事、任地に着きました。



が生徒の報償金の何かの積立の一部でお払いを願いたいと思います。これは飴状より少し水に近い位の加里石鹼で一人一人の分配困難、アルミの弁当箱も痛むし、どろ／＼で口が大きくないと瓶には入らず、結局少量づつ、石油かんから出して使用させることにしました。洗濯の量により多少不公平も出来ませうし、又極く少量で役に立つだけあって非常に高価であり、一人一個宛の固形石鹼ならば八銭か十銭で生徒より徴収も楽ですが、一人五十銭余につくものですから、積立金の方から差引く方がい、かと思えますからお願いします。書留を家より取る生徒がありませんが、栄養剤、肝油球などを買ふらしく相当食堂でも見受けれます。六日の電休には鎌倉へ行つたもの数名、鶴岡八幡宮のお札を飾つてみました。五円の小遣の中から大口な金額を引かれるとつらい連中もあるやうです。此の六日の電休日川崎本社は前日の五日に報償金が渡りましたが、こちらは三日遅れて八日、為めに校金の中より今月分として五円宛貸出しました。其の人数は三十人で百五十円、五十六人中の半分過ぎです。小生の携帯金額も牟岐先生より引継いだ百円と合せて放出。番傘六本配給くじにてつけた所一円五十二銭なか／＼困難らしく未だ持つて来ないものがあります。十月からは電休日は二日（九月は未だ三日間、六日、十七日、二十七日）です。五円は濫費に陥らず丁度よい所ですが、何か高い配給があればこたへる様子です。彼等は通信費だけでも恐らく二円以上はかかつてゐると思はれます。中には三、四円も

あるでせう。（東京はがきなしの現在、封筒便箋を入れ、ば）それに肝油球などをやれば相当のものと思はれます。新聞を見るもの夕刊を買ふもの。家庭でも今迄よりは金はかからぬので月に五円や拾円は送るのではないかと思はれ、東京には必ず誰にでも親戚があるので電休外出の際などにそちらへ送金して貰つて置いたのを取ららしい形跡も見えます。五円の報償金に拾円やれば室に帰ればすぐ五円つり銭を持つて来る。誰か持つてるものが必ずあるやうです。今の所工員と仲よしになり外出するものは一人もない。

昨日は岩商には液状石鹼の前に固形石鹼とシヤンプーが配給されたから、こちらも欲しいと電話して貰つた所、あれは特に岩商にやつたもので、岩中の分はあとでやる目算で取つて置いてある。欲しければ差上げますと言ふので欲しいと言つて貰ひました。何もかも継子扱ひに見え癪にさわることに夥しい。こちらの事務では「何でもい、からどん／＼言つて下さい、私等には言はれないと知らないでゐますから……」と、こちらでも気の毒がつてる始末。食糧は二日前以来まづ／＼順当、これに気をゆるせば又減らされる憂なしとせずです。頭痛で寮にゐて寝てる奴が直接本社から食物が来る為め、働いてるものより多くては話にならぬ。怠け者奨励になり、むしろこんな奴等は半分でい、です。明日（十日）は身体検査です。わざ／＼面会に、或は所用のついでに上京して面会に来る父兄中には、子供を明日電休だから一晩連れて行きた

大いなる文学のために、死んで下さい。

自分も死にます。

この戦争のために。

この便りのあと、三田循司はほんとうにアツツ島で散華した。そして、この便りこそ最高の詩ではないかと、太宰は年少の友の死をいたんでゐる。

いなど、言ふもの、でなくとも明朝は早く帰しますなどあり「此処は軍隊です」悉く拒絶。但し寮へお泊りの方は其の部屋へ寝る時はお貸ししますと言つてゐます。寮へ泊り子供を中に入れて一晩寝たのは藤沢芳雄の父母だけです、後は連れ出して点呼時間を過ぎる、其の後病気になる（父兄の帰郷後）こと又妙で、激励どころか逆効果が多い程です。舎の統制を紊しに来るやうで面白くない、藤沢のやうなのは模範です。其の他に、の一人、二人。

校長先生

牟岐先生

小林生

職員・生徒・父兄のいづれにとつても、まことにつらいことの多い時代であつた。